

殊更にとりあげ、すぐれた科学者とその業績を傷つける以外に役に立たない論をすすめるのは科学的とはいい難く、科学に対する一般人の理解に悪影響を及ぼすものと考える。

(新潟薬科大学)

F・グリソンの被刺激性学説とその影響

栗本宗治

Francis Glisson 1597-1677 は Caius College 1617' MD Cambridge 1634' FRCP 1635' Regius Professor of Physic, Cambridge 1636-1677' Anatomy Reader, RCP 1639-' 著書として De Rachitides 1650' De Hepate 1654' Tractatus de Natura Substantiae energetica 1672' De Ventriculo et Intestinis 1677' がある (Munk's Roll vol. 1, 1878)。

水ブレシスモ法によって上腕筋収縮時に容積減少をみとめ、当時の古典学説を批判したことは周知である(例えば Fulton: Selected Readings)。しかしグリソンの中心思想は晩年二著書における被刺激性学説である。

グリソン学説をつぐものは十八世紀 John Brown 1735-1788 の Brunonian System である。すぐこの原形質はフライソンの説くように excitable であり、ベルナル(被刺

激性＝興奮性)によつて組織と細胞とつゞつてこゝに引かれた (Bayliss: Principles of General Physiology, 3rd ed. 1924 Ex-citation and Inhibition の章)。今日、細胞膜や分子レベルに視点は拡がった。

グリソンの fundamental と energetic subsistence とを考えた。そして生体構造として irritable fibrarum について論じる。古典学説以来最初の生に関する一般論といえる。

グリソン学説は Haller, Borden, Barthez などによつて行かれたが、それらは筋、神経についての各論の方向にすすんで、生的一般論としてはむしろ混乱をみた。Brownism の出現はこのような背景においてであった (Verworn's Splanan Lecture)。ブラウン著 Elements of Medicine 1778 は体系として簡明であるのみでなく、当時の治療医学の基礎でもあった。その影響は大で前世紀のグリソン学説とは対照的であった (ブラウン説の流の一つ Pneumatic Medicine、さらにそれから派生した麻醉についてはすでに本学会において発表した)。

グリソン学説は十九世紀に具体的検討がなされる、

Virchow's Cellularpathologie 1859 第十四講、Bernard's Les Phénomènes de la Vie 1878 第七講、Propriété du Protoplasma—Irritabilité, Sensibilité。

今世紀、例えば James Mackenzie は関連痛について irritable foci of the spinal cord、リウマチ熱について irritable heart を説いた。その頃 George Crile (クリーンマン) は Kinetic Theory of Shock について Anoci-Association として Adaptation を説いた。異常なもし過剰刺激とその治療に関してであり、それらにグリソンの直接引用はないが思想のつながりはみのがせない。

(西宮市)